HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	候孝賢映画研究 [全文の要約]
Author(s)	龔, 金浪
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第15243号
Issue Date	2022-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87750
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Jinlang_Gong_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：　龔　金浪

学位論文題名
侯孝賢映画研究

・本論文の観点と方法

本論は、台湾の映画監督侯孝賢（ホウ・シャオシェン）の映画作品を研究対象とする作家研究である。具体的なアプローチとしては、これまでの侯孝賢映画研究における主流的なカルチュラル・スタディーズから距離を保ち、美学研究の視点から作品論を軸に、彼の全体の映像スタイルおよびその変遷をめぐって考察を進める。本論の全体は、主に二つの目的をめぐって展開する。一つは、各作品における固有の問題点を考察することによって、カメラワーク、演出、ナラティブ、編集などの映像を構成する諸要素の細部に宿る豊かな魅力、すなわち作家性を引き出し、作品の内部にある美学的創造に迫ること。もう一つは、侯孝賢のフィルモグラフィーにおける各段階、とりわけ後期の代表作を分析することによって、映像表現における変化しつつある侯孝賢の全体像を捉えることである。

・本論文の内容

以上の目的に向けて、本論は侯孝賢のフィルモグラフィーから七本の代表作を考察対象として取り上げ、考察を展開した。以下に各章の概要を示す。

第一章では、初期の娯楽商業作品からニューシネマ時代に入る作品『風櫃の少年』を取り上げた。本章は、まず台湾映画史と映像表現といった二つの側面から、本作の分岐点としての位置づけを考え直した。次に、本作における変化に着目し、ロングショット、固定ショット、主観ショットなどの具体的なカメラワークから、監督がいかに「観る」ことを映像に導入するかを検討した。最後に、本作における凝視から逸脱する要素を手がかりとして、演出の面から、監督によって意識的に描き出される「間」を抽出し、さらに本作における魅力的な中核となるものは、「間」を生きている青春そのものだと指摘した。

第二章では、ニューシネマ時代の「侯氏スタイル」の成熟を体現する恋愛映画『恋恋風塵』を取り上げた。具体的には、本作における感情表現の仕方に着目し、人物についての表現、物語の展開、カメラワークの特徴といった三つの次元から映像分析を行い、感傷を帯びた物語の中にある「感傷とはまるで異質のもの」について考察した。結論的には、その「異質のもの」が、本作における外への空間の線に由来するものであり、個人ないし人間を越える時空間と結びついているものだと明らかにした。

第三章では、侯孝賢の最も知られている「歴史三部作」の第二部『戯夢人生』を考察の対象とした。本章は、先行研究で繰り返し言及される「純粋」という言葉を切り口として、『戯夢人生』における「純粋」と思わせる映画表現の諸相を考察した。まず、従来の作品と比較しながら、本作において多用される「テキスト的発話」における自立性と物語を語る能力を論じた。そして、照明や構図などの演出から、映像がいかに人物の身振りによって人物の性格や感情を表すのかを分析した。最後に、言葉と映像が互いに離れつつ、「純粋」さを獲得すると同時に、別の次元で互いにもう一方の機能取り込みを指向していくというような側面を持つことを指摘した。

第四章では、従来の「侯氏スタイル」と異なる作風を見せる『憂鬱な楽園』を取り上げた。本章は、まず『憂鬱な楽園』における変化を手がかりとし、乗り物、主観ショット、暴力場面などの側面から、本作で新たに生起した「生の現在進行形」を分析した。そして、時間と空間から多方向に拡散する出来事の複数性を論じた。最後に二者の絡み合いによって生きることの複数性を、生の表出とその消耗の間の、永遠に反復している人生そのものの運動と関連付けて論じた。

第五章では、百年前の上海租界を舞台にした古典小説『海上花列伝』から改編した『フラワーズ・オブ・シャンハイ』を取り上げる。本章は、監督がいかに表したいことをシンプルな表面に隠すのかという作品全体を貫く手法に注目した。具体的には、制作、ナラティブ、映像表現といった三つの側面から、本作におけるシンプルな表面の裏にある複雑な様相を考察した。結論としては、本作は、決して欧米に迎合するために作られたエキゾチックな作品ではなく、むしろ人間に共通するものを表しているものだと言えようと指摘した。

第六章では、映画監督小津安二郎へのオマージュ作品『珈琲時光』を取り上げた。本章は、オマージュの視座から、本作におけるオマージュのあり方を細かく検討した。具体的には、先行研究でオマージュの表象とみなされていることについての質疑から、本作が各次元で小津を裏切っている事実を明らかにした。また、「間接的に捉えること」と「東京物語の二重性」から、その裏切っている方法、即ち本作の特異点を詳細に考察した。最後に、小津の創作理念と映像表現を参照しながら、侯孝賢なりのオマージュのやり方を解明した。

第七章では、『唐宋伝奇」に題材を採った武侠映画『黒衣の刺客』を取り上げた。本章は、本作における特別な緩慢さを中心に、物語が進行するにつれて、各段階で現れている緩慢さおよびその成因を検討した。具体的には、特権化された日常性、ものの存在、「シチュエーション・シークェンス」、過剰な時間という四つの側面から分析した。そして、その緩慢さの成因が行動への抑制という共通点に帰着することを指摘し、本作における緩慢さが行動の反対面に立ち、アンチ行動、あるいはアンチアクションという性格を有することを明らかにした。

最終章では、侯孝賢映画のスタイルの変遷を、より全面的な視点から取り上げた作品を振り返ながら整理した。そして、異なる題材を取り上げ、変化しつつあるスタイルで作られる各作品の間に共通する特徴および作家性を、「間接性」という点に絞って論じた。さらにその「間接性」という特徴による複数の物事の「間」を反復する映像と、複数の存在状態の「間」を生きている登場人物を論じた上で、その「間」の映像が侯孝賢のいった「生の喜び」と緊密に関わっているのだと指摘した。